第 41 回 株式会社 USEN 放送番組審議会 議事録

開催日時:平成 26 年 4 月 22 日 16:00～

開催場所:東京都港区北青山 3-1-2 USEN 本社

■出席者

湯川 れい子 委員長

山本 武司 副委員長

富澤 一誠 委員

品田 英雄 委員

■欠席者

大林 宣彦 委員

■局側出席者

田村 代表取締役社長

大田 取締役常務執行役員 コンテンツプロデュース統括部長兼企業法人本部長

鈴木 顧問

益弘 顧問

山下 コンテンツプロデュース統括部 制作部長

松本 コンテンツプロデュース統括部 編成部長

村田 コンテンツプロデュース統括部 制作部 制作 2 課長

小島 番組制作ディレクター

岩崎 音楽制作ディレクター

沖 コーポレート本部 広報部長

【番組審議会事務局:薬師寺】

議事内容

1. 会社動向、放送事業動向についての報告

(1)オリジナル BGM プロデュースについて

2014 年 3 月 7 日にオープンしたあべのハルカス近鉄本店のパウダールーム、あべのハルカスの展望台ハルカス 300 にオリジナル BGM をプロデュース。また 3 月 20 にオープンした COREDO 室町のオリジナル BGM もプロデュースした。

(2)法人向け音楽放送サービス「Sound Design for OFFICE(SDO) 」1 周年記念キャンペーンについて

2014 年 2 月 12 日～3 月 11 日まで、SDO サービス開始 1 周年を記念して、WEB サイトにてオリジナル制作楽曲をプレゼントする等のキャンペーンを行った。

(3)会報誌「With Music vol.27」の発行について

2014 年 3 月、会報誌「With Music vol.27(2014 年 4～6 月号)」を発行し、業務店/個人宅のお客様にお届けした。

2. 審議課題

「USEN オリジナル制作楽曲」について

【対象番組】

■H-16 カジュアル・クラシック

■I-10 イージーリスニング J-POP

■I-21 J-POP JAZZ COVERS

3. 番組審議

【放送局】

今回は自社スタジオ『USEN WHITE STUDUO』で制作しているオリジナル楽曲を放送している番組から、クラシック音楽をカジュアルなアレンジでお届けする「H-16 カジュアル・クラシック」、J-POP のヒット曲をポップス・オーケストラによるアレンジでお届けする「I-10 イージーリスニング J-POP」、J-POP のヒット曲をピアノ・トリオ・ジャズによるアレンジでお届けする「I-21 J-POP JAZZ COVERS」の 3 番組について審議していただきたい。

【審議委員】

「H-16 カジュアル・クラシック」ではクラシックを題材にしているが、中にはこれで良いのかと疑問に感じるようなレベルの演奏の楽曲もある。番組を聴いていると、レコーディング当日にプレイヤーに譜面を渡して、少し練習をして、その日のうちに数曲収録しているように感じられるが、例えば、ショパンの「ノクターン第 20 番」のヴァイオリン・ソロなどは非常に難しいので、事前にアレンジ譜をプレイヤーに渡して準備をしてもらい、レコーディングに臨まなければ、到底できないだろう。また、そもそもピアノのフレーズをヴァイオリンで弾かせたりするから、非常に辛いのではないか。いかに良くしていくかだが、プレイヤーのレベルの問題もあるが、やはり最終的には「アレンジャーとプレイヤーの関係」に行きつくのではないか。プレイヤーを見定めてアレンジをするべきであり、見定めていないから、無茶なアレンジになっていく。(ヴァイオリンの)第 5 ポジションのような(演奏が難しい)ところで、ものすごく速いフレーズを、ヴィブラートとスピッカートを同時にかけながら演奏するのは、16 小節も続くと結構キツいと思う。

また、ベートーベンの「シンフォニー第 5 番 第 2 楽章」を室内楽アレンジにしたものがあったが、終始オン・ザ・ビートで、シンフォニーという感じではなくなっていた。BGM として聴かせるためにはそうせざるを得ないのだろうが、他の楽曲でも

ヴァイオリンやヴィオラ、チェロ等のソロの曲を合奏にアレンジしているために、(プレイヤーが)譜面に忠実になり過ぎ、抑揚がなくなってしまったりもしていた。1 日に何曲も録音するため、指揮者とプレイヤーが楽曲の細部についてまで打合せるのは時間的に難しいこともあり、プレイヤーはだんだん保守的になってしまうということもあるだろう。このような制作の仕方では、ライヴコンサートで感じる、あの勢いのようなものも生まれてこないし、10 年くらい経った時に「この音楽はいかがなものか」という議論が起こるだろう。非常に苦労するところだとは思うが、良いアレンジャーとプレイヤーを集める手腕も必要だ。
クラシックをカジュアルにアレンジすることで、新たな価値を生み出そうという試みと努力については良いとは思う。

【放送局】
アレンジャーに対して、どのプレイヤーを起用するかは相談の上でやってはいる。ただ、決められた時間内で何曲録らなければいけないという制約もあり、その中で最大限できることをしているというのは事実だ。(H-16ch は)「クラシックの作品に近づこう」という視点ではなく、「クラシックのメロディを使って、イージーリスニングとして素晴らしいものを作りたい」という視点で作っている。確かにソロで弾いた時の抑揚などをスポイルすることになってはしまうが、単純にスポイルしてしまうと、ただの「原曲のマイナス」になってしまうので、「違うもの」という意識で作っている。

【審議委員】
「C-38 ヒーリング・ベスト・セレクション」では宮本文昭さん、坂本龍一さん、大島ミチルさん、松谷卓さん、葉加瀬太郎さんらの音楽が流れているが、(それらと USEN の制作楽曲を比べると)勝負ありあり(＝USEN が劣る)。彼らの音楽は素晴らしく、一日中でも流していたいと思う。カヴァー曲であっても芸術性がとても豊かなのだ。

【放送局】
そのご意見は非常に適切であり、貴重だと思う。クラシックばかりではないと思うが、アーティストが何かの想いを込めて完成させた楽曲をアレンジする時、「業務店用の BGM だから」ということで、抑揚や、本来その楽曲が持っているパワーといったものをスポイルさせて BGM に仕立てているつもりはない。しかし、結果としてそのように聴こえるのであれば、そこには改善点があるのではないかと思う。

【審議委員】
それは皆さん(USEN の音楽制作者)側ではなく、プレイヤー側に問題が起こってくるのだ。放送には膨大な楽曲数が必要なので、1 日にレコーディングする数も多くなる。それが続くと、演奏者は「(収録の機会は)またあるじゃないか。今日発散できなかったことは次回の仕事でやろう」と考えてしまう。また、同じメンバーで録音を積み重ねていくと、仲間意識が出来上がってしまい、なかなか成長できなくなる。

【審議委員】
今回の審議対象ではないが、過去(第 27 回審議会)に審議された「I-09 J-POP ボサノヴァ BGM」はアレンジャーを見直して、とても良くなった。それと同じようなことができるか。また、有り物(市販音源)を集めて番組を作った方がコストもかからず、効率的ではないかと考えた。例えば、「I-10 イージーリスニング J-POP」は、本物(原曲)と比べると少しチープに感じられたが、市販で良いものがある。1993 年にとある企業から発売された CD ボックスで、さだまさし監修、服部克久音楽監督、選曲は私が選び 132 曲のニューミュージックの名曲をポップス・オーケストラでアレンジしたものだが、アレン

ジャーも素晴らしい。浅川朋之、奥慶一、斎藤毅、佐橋俊彦、服部克久、服部隆之、羽田健太郎、堀井勝美、前田憲男、美野春樹、宮川彬良、宮川泰、渡辺俊幸らがアレンジした。そして、録音は日本と海外で行われ、海外の演奏はロンドン交響楽団、ロイヤルフィルハーモニー管弦楽団、BBC 交響楽団といった楽団が参加した。内容はとにかく素晴らしい。当然、制作費も相当かかっている。この CD に 132 曲あるので、これをそのまま放送した方が良いのではないか。音源としてこういう CD を活かした方が効率的ではないかと思う。

「I-21 J-POP JAZZ COVERS」は、番組を聴いた時にちょうど井上陽水さんの「ジェラシー」が流れてきて、最初、「新しいジェラシーか？」と思ったが、聴いているとジンジンときた（感動した）。これは良いと思った。

【審議委員】

一生懸命考えて作るという情熱は評価させて頂きたい。また、聴取者の皆様が満足してお金を支払って下さるのであれば、音楽への思い入れはあるが、商品としては間違いないと思う。

全体的な感想としては、昔スーパーで J-POP のカヴァー楽曲を聴いた時には寂しくなることが多かったが、今は結構良くなったんだと感じられた。たくさんの J-POP が生まれ、質も上がり、洋楽のようにカヴァーをしても魅力的に演奏することができていると思った。番組ごとには、まず「I-21 J-POP JAZZ COVERS」は聴きながら「この原曲は何かな？」と思うこともあるが、仕事中や食事中に聴いても、心地良く自然な感じで、豊かな空間を作ってくれると思った。「I-10 イージーリスニング J-POP」は良いものと悪いものがあるという印象を受けた。J-POP のメロディをカラオケでいうガイドラインのように弾いている部分が気になる時もありながら、良い曲もあった。オーケストラがいながらドラムが入り、特にスネアを叩く音が強過ぎるアレンジが嫌な感じで、安っぽい感じがした。「H-16 カジュアル・クラシック」は番組説明文に「優雅さ」「高級感」という言葉が使われていたが、カジュアルというか少しチープな感じがした。それはなぜかというと、作られているものがチープだということもあるが、10～20 年前と比較して、本物を聴く機会が増えているので、比較してしまうからではないだろうか。空間のイメージでいうと、冴えないスーパーマーケットとか、古臭いホテルのロビーみたいになっていて、寂れた空気を出すような効果はあるが、優雅さや高級感とは違うと思った。

【審議委員】

お店で使いやすくするために故意に楽曲の凸凹をなくしていて、そこには苦労もあると思う。昔、様々なイージーリスニングのオーケストラがあったが、打ち込みでもシンセサイザーでもなく、本物の弦楽器を使っていて、それはそれですごく良かったと思う。だから逆に打ち込みとかシンセサイザーを使うことで、「今感」というものが出るのかも知れない。安っぽさ、チープさというのもかえってお店にとっては良いのかも知れないし、使いやすいのかも知れないとも思う。厚みも大きさも違う J-POP のオリジナル曲を凸凹なく、邪魔にならずに聴けるものにすることにより、お店としては使いやすいから、こういうチャンネルを作っているのだと思う。そう考えると、今までもこういうものはあり、例えば、オルゴール・カヴァーが流行った時代もあった。時代の流行で 1 つのテイストを作り出すのは、意味があることだと思う。チープであっても、チープならチープな意味があると思う。オルゴールがそうであったように、USEN のオリジナル制作の中でも、もう一工夫二工夫すれば時代にはまるものがあるような気がする。必ずしも、チープだということを否定的に捉えるものでもないかも知れない。

【放送局】

確かにやり方をもう少し工夫すれば、もっと良いものになるかも知れない。

【審議委員】

過去審議した「A-09 美食空間向けジャズ」は非常に芸術性の高い番組だった。番組制作者には、美食と最高のお店の確固たるイメージがあったのだと思う。編成やテンポは様々あるが、どの曲も実に強要しない、食べ物を邪魔しない。そこに配慮したと言っていたが、そのくらい、今回の番組も深めても良いのではないか。
クライスラーの「愛の喜び」をイージーリスニングで聴いたが、技術の足りないプレイヤーが弾かされているようで、とてもつらかった。クライスラーの曲は、名器で名人が弾くものだ。その曲にチャレンジするなら、よほど頑張るか、お店で聴いている方々に喜んで頂ける高い妥協点をもっと模索した方が良い。平坦にアレンジされていたのも寂しく感じられた。売れれば構わないとも思うが、コンテンツとはそこに芸術性があったり、USEN を愛する気持ちに裏づけされるものだろう。やはりアレンジャーの問題だと思う。

【審議委員】
資料に「最近は打ち込み音源を駆使し、生楽器プラス打ち込み音源の一体感を意識して制作している」と書いているが、やはり打ち込み音源はクラシックには難しいのかも知れない。

【審議委員】
BGM として敢えて邪魔にならない音楽を作っているなら、ビジネスとしては正しいのかも知れない。ただ、年間 800 曲制作するということだが、半分にして良いものを作った方が良いのではないかとも思う。

【審議委員】
年間 800 曲の制作には相当な制作費がかかる。そこまでかける理由があるからやっているとは思うが、それだけの意味があるのか。費用対効果はどうなのか。

【放送局】
1 つは、これは制作者のエゴと言われるかも知れないが、ないものがあれば作りたいという思いがある。ないものを作り出そう、新しいニーズを取り込もうというところ。USEN は飲食店から始まったが、銀行や医療機関等にも音の演出をお届けする中で、どのような音が良いのだろうと考え、市販されているものが少ないのであれば作ろうという、ある意味、単純な発想からこうした取組みが始まり、現在も続けさせて頂いている。しかし、今指摘を頂いたことを受け、本当に意味、意義がどこまであるのかを、ここでいったん立ち止まって考え直すことも必要なのかも知れないと感じた。また、せっかく作るのであれば良いものを作ろうということだが、その良いものの定義も今一度考えたいと思う。音楽制作者だけではなく、アレンジャーやミュージシャンのクオリティーについても。

【審議委員】
どうしても予算で決まってしまうから、いかに人選を広げ、的確なところに、どういう予算で、どう発注するかだが、かなりの腕を要するだろう。

【審議委員】
USEN は大阪から生まれた企業で、大阪にスタジオを持ち、オリジナル音楽制作は大阪をベースされているので、そこに対する期待や必要性も持たれていると思う。もし仮にこの審議を受けて、予算を半分にして撤退していく方向になると勿体ない。ビジネスで BGM を送るばかりでなく、世の中を活性化することも大事だと思う。お客様企業との取組みの中

で、USEN の大阪のスタジオで、大阪の学生に作曲・演奏してもらって曲を作り、新しい大阪を作っていくということをされたが、それは新しいミュージシャンを育てることにも繋がる。音楽を届けることで世の中を活性化するという意味でも、USEN の事業はとても大事なのだと思う。ここにヒントを得て、新たにアレンジャーと接するという手もあるかも知れない。

【放送局】
学生さんとか、これから活躍する世代も取り上げていかないといけないと感じている。現場の高齢化も進んでいるので、実際にそのように取り組んでいる。ただ演奏に耐えられなかったらブッキングできないので、それは繰り返している。

【審議委員】
大阪の音楽大学からすると、USEN 音楽放送が一つの市場を作る大事な企業になっている。それは関東で言えば財団法人や音楽財団がするべきことで、それを企業がなさっているところも評価されるべきだと思う。

【審議委員】
大阪の話も出たが、音楽制作にかかるコストについては、同じ規模のものを東京で作るとかなり高くなる。当社が大阪発祥だからということもあるので、結果論かも知れないが、比較すると安価で作れている現状もある。全国放送の楽曲を東京より制作コストの低い大阪で作れていることは、我々としてもメリットである。

【審議委員】
いかにニーズがあるところで、クオリティーの高いものを創意工夫して作るか。USEN ならではのテイストができれば良いと思う。

【放送局】
作るということはとても大切なこと。願わくば、USEN の大阪のスタジオに様々な音楽学校の方に来て頂き、そこで演奏できることを誇りに思って頂けるような場所にしていきたい。その結果、良いものができる。これは非常に大事なことだ。今、（音楽家が）働く場所がないから。

【審議委員】
同感だ。今、コマーシャルでも二次使用の音源ばかりが使われていて、新しく作る所がないくらいだ。その中で、こんなこと（音楽制作）を続けて頂けるということは、ものすごく素晴らしいことだと思う。

【放送局】
音楽制作を続ける意義も認めて頂いたが、当然ながらビジネスなので、制作したものをどう世の中に出すかということも大事であると認識している。お客様よりお金を頂き、使って頂けるところまで拘りたい。今回頂いたご指摘、ご意見を活かし、より良い音楽制作を目指していきたい。